

「鳥の北斗七星」 宮沢賢治作 を読んで



絵 渡 正子

憎むことのできない敵を殺さないで
いっように早くこの世界がなります
ように

神奈川県 小池潮里

戦争が起きてしまった。

（あゝ、マチエル様、どうか憎むことのできない敵を
殺さないでいっように早くこの世界がなりますよう

に、そのためならば、わたくしのからだなどは、何
べん引き裂かれてもかまいません。）

宮沢賢治の童話『鳥の北斗七星』を読むたび、鳥の
大尉が祈る部分に打たれていた自分は不戦の世界に近
づくために、ひき裂かれる努力をしたのか。十分だっ
たのか。と考えてしまう。でも、まだあきらめたわけ
ではない。

昨年、85歳の父から戦時中の話を聞いた。終戦が近

い頃の話だったので、父は8歳ぐらいたと思う。港町で船があつたので、よく祖父（私の曾祖父）と一緒に、母（私の祖母）の実家から食べ物運ぶのを手伝ったり、魚を捕ったりしていたらしい。ある時、グラマン一機が船めがけて降りてきた。海上にほかの船はなく、逃げ場もなかった。「撃たれる、もうだめだ」と思ったが、脅かすように急降下してブワツと煽つただけで飛び去って行つたらしい。パイロットの顔がはつきり見えたそうだ。ということはあちらも「丸腰の老人と子ども」をはつきり視認したに違いない。恐らく若者と思われる米軍パイロットは、どんな気持ちだつたらうと思う。どんな人だつたのだろう。どんな任務で飛んでいたのか。家族や恋人が国で待っていたりするののか。信仰があつたのかもしれない。もうすぐ終戦と知っていたかもしれない。葛藤があつたかもしれない。いずれにしても、「必要がないなら、殺したくない」と考える人でなかったら、今の私はいないということになる。

世界は地獄の状況にある。明日戦死するかもしれないという時、鳥の大尉のようなまっすぐに上に向かうような心を持てるだろうか。戦っているひと、傷ついているひとだけじゃなく、今生きている人全員の問題だ。人間であることをあきらめず、葛藤から目を背けず、誰かのせいにならないで、人類ぜんたいが正しい選択が出来るように、早くこの世界がなりますように。『鳥の北斗七星』は、読むたびに心が洗われ、身が引き締まるように感じ、私も一緒に祈りたくなる。

「鳥の北斗七星」を読んで

埼玉県 小川 勉

「鳥の北斗七星」は、命懸けの言葉が多い作品なので、世界が戦争のない平和な社会になることを願いながら読みました。

「大丈夫さ。しかしもちろん戦争のことだから、どういふ張合でどんなことがあるかもわからない。そのときはおまえはね、おれとの約束はすっかり消えたんだから、外へ嫁ってくれ。」「泣くな、みっともない。」——鳥の大尉が山鳥との戦いを前日に控えて許嫁に言うのですが、待つ身の女性は男性よりもつらいかも知れませんが、狼狽しているところにさらにきつい一言がありますが、まるでいつ死んでしまうかわからない仕事なのだから、別れの覚悟が出来ていなくてどうするのだという意味が込められているようです。

「おれはあした戦死するのだ。」——その戦いの前夜、

鳥の大尉はマジエルの星に祈りながら、自分は力いっぱいに戦うことを誓います。このあたりでは武士道精神を感じます。迷いながらも明日の戦いに無心になり、さらに集中していく姿が見えてくるようです。また、彼女へのやさしい気持ちが伝わってきます。

「ありがとうございます。就^つては敵の死骸を葬りたいとおもいますが、お許し下さいませしょうか。」——少佐になった鳥の大尉は山鳥に勝つのですが、山鳥を思い出して涙をこぼします。戦いは終わっているのですが、「敵を愛す」ということを実践しています。何と素晴らしい性格なのでしょう。今、ロシアとウクライナの戦争の中、誰もが平和な社会を望んでいると思いますが、軍事支援より継続的に停戦を訴えて早く戦争を終わらせてほしいと思います。世界中の人が安心して暮らせる世界が早く実現することを願います。